

受講番号 18093 学校名 梶原中学校 氏名 濱田 真美

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 3年2組 生徒数 24 名
 科目名 3年 単位数(授業時数) 3 時間 使用教科書名 New Horizon English Course 3(東京書籍)

クラスの様子・特徴

明るく(元気で、男女の仲も良い)、挙手をしての発表もよくでき、比較的意欲的に授業に臨むことができるが、落ち着きがなく、人の話を最後までしっかり聞けない時がある。単発的な活動を好み、地の詰んだ作業を嫌う(飽きっぽく、面倒くさがる)生徒が多い。

問題の確定

反復練習に取り組む姿勢が弱い、基本的な語句や表現、基本文型が定着していない。特に「書くこと」を苦手とする生徒が多い。

予備調査

A 授業の観察

積極的に発表し、音読の声も大きい。対話やゲーム的要素のある活動には意欲的に参加できるが、ややもすると落ち着きがなくなり、授業に集中できなくなる。与えられた課題には真面目に取り組むが、少し複雑な内容になるとすぐにあるきらめてしまう。

B 生徒による授業評価

英語は難しいと感じ、特に「話すこと」「書くこと」に対して苦手意識をもっている生徒が6割である。覚えることが多すぎて大変だと感じている生徒が多いが、どの生徒も「わかりたい」「話したい」「書けるようになりたい」という願いを持っている。

C 学力データ

6月の第2回実力テストで「表現の能力」でB評価以上の生徒が3割、「知識・理解」でB評価以上の生徒が3割である。9月の第3回実力テストでもA,B評価の生徒数は増加していない。聞くことでも、ある程度の長さの文章になると内容を理解することが弱い。

リサーチ・クエスト

中学3年程度の基本文型の定着を図り、1～2文の短文から5～6文程度の英文を書く力を身につけさせ、半数の生徒があるトピックについて内容豊かな英文が書けるようにするためには、どのような指導をすればよいのか。

仮説・実践・検証

仮説1

基本文やよく使われる表現のインプット活動や語句テスト、アウトプットのためのディクテーション活動を行うことで、語句や基本文の定着が図られるだろう。

実践1

以前から実施している語句5問テストやインプット活動を継続して行った。語句テストは、初めは5問指定していたが、10月からは指定せずに行った。インプット活動は、1ユニットの本文中の基本文とよく使われる表現を20程度シートにまとめて配布し、発音と意味を理解するよう口頭練習を繰り返し、次時の活動の準備ができるようにした。基本文から1～2文指定し、ディクテーションテストを行った。

検証1

インプット活動はペアで行うのでゲーム的要素があるため、活動には意欲的に取り組んだが、語句テスト、ディクテーションとも事前に準備して臨む生徒が少なく、その場限りの活動で終わってしまった。反復することが大事であるということは活動から理解してくれてはいるものの、それを家庭学習等で復習することを徹底できなかったため、知識として定着させられなかった。

仮説2

「読めない単語は書けない、読めない文は書けない」を前提に、教科書本文の音読指導を工夫することで、音読に対して自信をつけさせるとともに、基本文の使い方や意味の理解を深めることができるだろう。

実践2

教科書本文のさまざまな練習方法で音読を行った。日本語訳を先に渡し全体の内容を理解させ、次に1語ずつの発音や意味の確認から、チャンク(意味の固まり)ごと、そして1文、全文へとスモールステップで行い、本文1ページにつき最低10回は音読させた。その都度評価を入れ、個人やペア、グループと練習形態を工夫し飽きさせないように練習させた。日本語から英語、英語から日本語を音読する練習も取り入れ、内容理解を図った。

検証2

1語読みやLook-Up、シャドウイングなど練習法の工夫で、練習後はほとんどの生徒が本文全体を音読できるようになった。1単語の発音や内容理解に重点を置いたため、表現力豊かな音読にはなっていないが、どの生徒も、繰り返し読めようという自信につながったようだ。また、スラッシュを入れ、意味の固まりを理解させることで、基本文型の使い方や意味を理解することに役立ったようである。

仮説3

学習した基本文型を用いながら、自分の気持ちや身のまわりのことを英語で表現する(書く)機会を多くし、教師の支援や辞書を活用することで、表現力(書く力)が養われるだろう。

実践3

基本文型の英文文から始め、書くことへの抵抗を無くすようにした。また、英文を作るときの手順、語順を理解させるように、短文を繰り返し書かせた。定期的に自己表現作文(5文以上の英文)を行う予定であったが、結果的には2回しかできなかった。身近なテーマやトピックを準備し、辞書を活用させるなどして、書きやすい雰囲気をつかった。

検証3

基本文など1～2文程度の英文を書くことに対する抵抗は、少なくなってきた。ある程度の英文で自己表現をするとなると、「言いたいことを英語で表現することは難しい、面倒くさい」と、まだまだ抵抗を感じている生徒もいるが、辞書を活用させることで、英語を書くことに対する抵抗は少なくなったようだ。自己表現に慣れさせるほど多く表現させることができなかった。また生徒一人ひとりへの支援が少なかった。

研究の成果

生徒と向き合って授業に臨むことができた。計画的に、また目標を明確にして指導することが大事であり、それによって「授業は変わる、生徒は変わる」ということを実感した。生徒は、1時間1時間の授業に意欲的に取り組み、繰り返すことが大事であるということをもどの生徒も理解してくれたようだ。英語を読むことへの抵抗感がある生徒が少なくなったことは成果である。書くことに対しては、辞書を活用させるなど書きやすい雰囲気をつかったことで、英語を書くことに抵抗感がある生徒が少なくなってきた。

今後の授業改善の課題

定期テストの結果を見ても、語句や基本文型を定着させることができたかどうかは疑問である。日々の授業での取り組みが、その場限りで終わらないようにするために、次時の活動やその後のテスト、実力テスト等にどうつなげるかが課題である。「覚えたことが使えない」状態にあるので、3学期は表現する場を多く設け、「使える英語」を目指して授業を計画し、実践していく必要がある。